

〔一般講演〕

1. カルシウム欠乏に関する研究  
— ビタミンDの成長期下顎頭に及ぼす影響 —

○大倉秀一郎、木村 光孝（九歯大・小児歯）

ビタミンDは骨組織の remodeling を調節する重要な因子の一つとされているが、実際にそれが骨組織にどのような形態的变化をもたらすかについては、必ずしも一致した見解に達していない。Resmussen (1969)はビタミンDのみの欠乏では脛骨の石灰化に幾分変化がある以外には骨の形成、吸収に認めるべき変化がないと報告している。しかし Baylink (1970)らは骨形成の減少と骨吸収の著しい増大がみられると報告している。また、ビタミンD欠乏のみでは骨組織には影響はなく、カルシウムやリンの欠乏が伴って初めて骨組織の変化がみられるという報告もある。近年、ビタミンD欠乏に関する研究の多くは、カルシウムやリンの欠乏と関連した研究が多い。しかし、これらの報告は主に長管骨の変化を検索したものであり、下顎頭の変化に関する研究はほとんどみられないようである。

そこで演者らは生体組織が最もカルシウムを多量に吸収する時期を考えて、離乳直後（生後3週齢）のラットを用い、食餌中のカルシウムとビタミンDの多寡による下顎頭の成長に及ぼす影響を検索した。

ラットは無作為に次の4群に分けた。

1. 標準食対照群
2. カルシウム欠乏食群
3. カルシウム・ビタミンD欠乏食群
4. ビタミンD欠乏食群

飼育4週目にそれぞれ放血致死させた。下顎頭を採取し、Softex Type CSM を用いて軟X線撮影を行って観察した。下顎頭は硝酸脱灰し、通法に従って、セロイジン包埋後15 $\mu$ m連続切片標本を作整しH・E染色を施して鏡見したので報告する。